

旅人は、旅をしていました。彼は——彼女かもしれませんが——名前を持っていません。家族も過去も、未来すらありません。旅人には今しかありませんでした。旅人はいつしか——それもつい、さつきかもしれないのですが——不安を持つようになりました。名前を持つていないということは、自分がいないのと同じです。自分がいないということは、まるで透明人間になってしまったかのように思えてしかたがないのです。それは旅人にとって、ひとつの恐怖になりました。

だから旅人は、自分を探す旅に出ることにしました。唯一の思い出である緑色のとんがり帽子と、おそろいの外套に身を包み、あてのない旅に出たのです。

今までさまざまなところを旅してきました。その中で旅人は、いつしか「ナナシの旅人」

と呼ばれるようになりました。

ですが、旅人のことを尋ねても答えはまるでバラバラです。

八十を超えた老人のようだという人もいれば、まだ十にも満たない子供だったと答える人もいます。女だとも、男だとも言っており、同じ答えは返ってきません。皆が唯一、口をそろえて言うのが、旅人の呼び名でした。人々は旅人のことを話題の便宜上「ナナシ」と呼んでいました。

なので、ここでも旅人のことを「ナナシ」と呼ぼうと思います。

# Story of Madashi



ナナツハナツ

sideA [大きくて小さなもの]





ある日、ナナシが大きな門の前に居ました。大きな外壁はずっと遠くまで続き終わりが見えません。目の前にある門ですら、見上げると『めまい』を起すほどの大きさです。ナナシは自分が小人にでもなったように思えてきました。

「ここには何があるんだろう」

ぐるりと外壁を見て回りましたが、中の様子はわかりません。困り果てたナナシは、門の前に座り込みました。誰か人が出てこないものかと思ったのですが、三十分待っても

一時間待っても門を開ける人は現れませんでした。

「誰かいませんか？」

ナナシは門に向かって叫びました。その声は不思議と山彦になり、遠くまで響いていきました。

しばらくまた、世界はナナシを独りにさせました。

ほんのその後、ズーン、ズーンと大きな地響きが聞こえてきました。どんどん大きくなっていきます。土が鳴り、天をも揺さぶるほどの地震に、ナナシは立ち続けることも座っている事もできません。とんがり帽子をしっかりと押さえて地べたに伏せました。それでも小さなナナシの体は、ズーン、ズーンという地響きと一緒にふわっ、ふわっと浮くのです。地面に落ちるたびにナナシは「痛い！」と声を上げました。

突然地震が止まりました。辺りは何事も無かったかのようにしんと静まりかえります。

すると今度は、石の門がゴゴゴツ……と音を立てました。重すぎてナナシの力では太刀打ちできなかった扉が、目の前でゆっくりと開いていきます。ナナシが通れるほどの隙間

が開くと、何事もなかったかのように止まりました。扉の向こう側は真つ暗で何も見えません。

ナナシはまた、扉を下から上へと見上げました。

真つ黒な隙間に、よくよく見てみれば小さな光がぼかりと、まるで星のように浮いているのです。そしてチカチカと瞬いたかと思えば、地を這うような低い声が頭上から降ってきました。

「小サイ、生き物」

その声にナナシは飛び上がるほど驚いて周りを見回しました。しかしナナシ以外には誰もいません、でも確かに声は聞こえました。

「誰ですか、どこにいるんですか？」

ナナシの声に、また星が瞬きました。

「才前、目ノ前、オレ、居ル」

声が聞こえるたびに、ナナシはきよろきよろと辺りを見回すのですが、暗闇の中に星が

ひとつあるだけ。はつきりとした姿は見えません。

「どこにいるのかわかりません、ちゃんと姿を見せてください」

ナナシがそう言いますと、石の扉がまたゴゴゴツ……と音を立てて開いてきます。

ナナシの目の前に現れたのは、大きな大きな、石の巨人でした。星だと思っていたものは、巨人の片目だったのです。その巨人の大きさと言ったらもう、ナナシが顔を見上げても頭のでっぺんが見えないのですから。しかしその立ち姿は、なるほど、扉の大きさはちょうどいい大きさになります。

「ここは、巨人さんの家なのかな」

ナナシは少し考えました。迷った末に大きな声で巨人に向かって言いました。

「ボクはボクの名前と、家族と過去を探して旅をしています！ 巨人さんは、ボクのこと知りませんか？」

小さなナナシの大きな声が、巨人に届くかはわかりません。ナナシは少し不安になり、しばらく巨人の様子を見守りました。

巨人は数回二星の目を瞬かせて、ゆつくりと首を左右に振りました。

「才前、オレ、知ラナイ。小サイ、生キ物、見ル、久シブリ」

巨人はまた二星の目を瞬かせると、片手をそっとナナシの前に差し出しました。

「昔、才前、似テル、タクサン、居タ。オレ、ココ、主。オレ、案内。才前、乗ル。オレ、才前、潰サナイ」

巨人の言葉にナナシは喜びました。もしかしたら、中に探しているものがあるかもしれない、そう考えていたからです。本当でしたら巨人に指で摘まんでもらい乗ったほうが早いのですが、何せ小さなナナシですから。誤つて潰されては元も子もありません。しかたなく巨人の手——というよりは指によじ登りました。何度か落ちそうになりましたが、やつとのことで腰を落ち着けると、巨人が一度頷いて門を潜りました。

巨人はナナシを乗せて街中を歩きます。

空からの眺めは、とても言葉で表現するには難しい世界でした。階段も家も何もかも、木ですら石のようなのです。しかしそのどれもが植物に覆われて、その姿を半ば隠してい

ます。そしてさらに不思議なことに、いたるところに巨人と同じ石像やナナシよりも大きな動物たちの石像が、やっぱり植物に覆われて点在していました。街中にはナナシと巨人以外に息づくものが居ないので、

でも街は、確かに生きてるように感じました。

「才前、何知リタイ？」

巨人の質問に、ナナシは先ほど言ったことをもう一度言いました。

「ボクは自分の名前と過去と家族を探しています。それが探せる場所か、もしくは人に会いたいです」

ナナシの答えに巨人は「ワカッタ」と言うと、方向を変えました。

その間も、ナナシは巨人の手の平から街を眺めました。数々の石像は多少ばらばらな大きさですが、どれもこれも皆、眠るようなポーズをとっています。中には風化してしまつたのか、一部が崩れてしまつた石像もありました。

「ここにはあなた一人だけなのですか？」

# Story of Nadeshii





ナナシはある日、小さな教会だらけの街にやってきました。綺麗な白いレンガで作られた街で、話を聞いたところによりますと、この土地には昔から神さまが実際に居て、少し離れたところに住んでいるそうです。だから必然的に信仰の厚い神官や牧師、その信者たちが住っていて、今の街になったそうです。ですが不思議なことに、この街の空はずっと曇っていました。ナナシが訪れてから数日経つのですが、一度も晴れ間を見た日はあり

ません。ざあざあと強い雨が降り、時にはごろんごろんと雷が鳴るのです。そのせいか、街の人たちもどんよりとした顔つきで、ため息を吐きながら空を見ていました。

ある日、ナナシはずっと雨が続く事を不思議に思い、数日泊めてもらっていた教会の、年老いた神官に話を尋ねました。

「なぜこの街は、ずっと雨が降っているのですか？」

白い牧師の服を着た神官は、さもありがたそうな口調でナナシに言いました。

「それは神さまが悲しんでおられるからさ」

ナナシはその答えになんだか違和感を覚えました。そして首を傾げながら神官の言ったことを反復すると、神官がさらに付け加えてくれました。

「今降っているこの雨は、神さまの泣いている涙なのだ。あの雷は神さまの泣き声。あの雲は神さまの悲しみ。この街には神さまが空に住んでいるのだが、あの雲の向こうですくと泣いてらっしゃるのだ。だからこの街もずっとこんな調子なんだよ」

神官の言ったことに、ナナシはさらに不思議そうに尋ねました。

「なぜ神さまは悲しんでいるのですか？ 誰も慰めたりはしないのですか？」

神官は困ったような顔をして、ナナシに言ったのです。

「それは私たちの理解に及ぶところではないのだ。神さまが泣くことなど無かったのだが、遠い昔のある日、突然泣き出してしまったそうさ。だが私たちは推測することしかできないのだよ、だって相手は神さまだからね。私たちは神さまに仕える住人。神様はあまりにも尊いお方だ。私たちが神さまに会うことは、身分の違いから禁じられているのだ」

そう言って神官はため息をつきました。

他の住人たちも困り果てたようにため息をつくばかり。相手が神さまですから諦める他なく、毎日のように傘を持ち歩き、時には家から一步も出ない日もあるそうです。いつの日にか、家同士を繋ぐ地下通路を建設しようという声も上がっています。それもこれも、全て神さまのためだと言いました。

「神さまは私たちの祈りにより糧を得ておいでなのです。それも数人の力ではいけません。私たちがひとつの場所に集まって一斉に祈る事で、神さまは食事をなさり安らぎを

得ると言われております。そのミサは毎日行わなければなりません。ですが、さすがの私たちも嵐の中を行き来するのは危険な時があります。昔、敬けんな信者がミサへ赴く途中、氾濫した川に誤って落ちてしまい、そのまま神さまの懐へ眠りに落ちたこともあり。神さまは、それはお嘆きになったことでしょう、慈悲深いお方ですから」

神官は感慨深げにそう言うと、窓の外を見てため息をつきました。

「私たちも神さまがなぜ悲しんでおられるのか尋ねることにやぶさかではありません。ですが、身分の違いがあまりにも大きすぎるのです」

そう言う神官の言葉に、ナナシは首を傾げました。

「なぜ会いに行つてはいけないのですか？ 神さまが決めた事なのですか？」

ナナシの質問に神官は首を横に振ります。

「いいえ、それは違います。神さまは慈悲深いお方。私たちにも分け隔てなく会う事を許してくださいました。ですが私たちは、万が一の事を考えております。我々は人間です。あまりにも熱狂的になりすぎ、神様を一人の物にすべく殺してしまおうとする信者もい



るでしょう。時に反逆の心を持ってしまい、神さまを疑う者も出てくるでしょう。私たちにどつて神さまは亡くしてはならない存在なのです、ありとあらゆる危険は排除しなければいけません」

なるほど、とナナシは頷きました。ナナシには神官の気持ちも、そうする人間がいるのかもわかりません。ですが考えてみると、少しわかるような気がしました。

「この街の人たちは誰も、神さまに会う事はできないのですか？」

ナナシの更なる質問に、神官は肯定の意を込めて頷きました。そして丁寧に「誰もおりません」と、付け加え言いました。

「それじゃあ、ボクが行きましょう」

ナナシの提案に、年老いた神官は驚き目を見開きました。そしてナナシをうるんな瞳で見つめ、疑います。

「あなたが？ なぜです、名前の無い旅のお方。あなたが神さまに会う必要がどこにあるというのです。この雨が嫌なら、街から出ればいい話ではないですか？」

「それは違います」

ナナシは年老いた神官を説き伏せるように言いました。

「ボクがこの街に来た時言つたように、ボクは名前を探す旅をしています。もし可能性があるなら、どんな小さな事でもいい、知りたいと思つています。もしかしたらボクはこの街の住人だったかもしれません、ボクは自分がどれくらい生きているのかもわからないので、もしかしたらあなたよりもずっとずっと昔にこの街に居たのかもしれません。神さまならずと生きているでしょう？ だから神さまだったら、ボクの事を知っているかも知れません。ボクの質問に、答えられるかもしれません」

それに、とナナシは付け加えるように言いました。

「ボクはこの国の住人ではありません。今のボクには『自分』というものがなくて、何者なのかもわかりません。もしかしたら、ボクはあなたたちの神さまとは違う、別の神さまかもしれないのです。そう考えれば、ボクは神様に会う身分であると言えますよね？」

ナナシは神官に向かってニコリと笑いかけました。（神官には口元だけでふつと笑ったよう